

無視できない軍事・災害のGHG排出

◆オランダの気象学者らがウクライナ侵攻によるGHG排出について警鐘

オランダの気象学者などはウクライナ侵攻によるGHG排出について2022年11月に報告をまとめ、COP27で発表した。22年2月～9月の7ヵ月に限るが、ウクライナ侵攻の影響は合計約1億CO₂tで、オランダの同期間の排出と同等と推定した。

表 ウクライナ侵攻におけるGHG推計排出量（22年2～9月の初期7ヵ月分）の内訳

排出分野	推計GHG（万CO ₂ t）	備考
難民の移動	139.7	国内外への避難移動（航空機利用含む）
戦闘	885.5	軍の燃料消費と弾薬使用など
火災	2,376.4	戦闘地域の森林、農場、住宅の火災など
建物など再構築	4,867.0	破壊された住宅やインフラの再建など
Nordstream1&2からの排出	1,460	天然ガス（9割がメタン）の漏出
合計	9,728.6	

（出所：「CLIMATE DAMAGE CAUSED BY RUSSIA'S WAR IN UKRAINE」, Initiative on GHG accounting of war 2022.11）

ウクライナ侵攻のこの期間内では、戦闘による排出より、Nordstream1&2からのメタン漏出による排出が大きい、と推計されたことが特徴的である。また、欧州森林火災情報システムを利用し4,861km²が焼失したと推計した。破壊された建物などは今後の再建時に排出される推計になるが、最も大きいと示した。

◆人為的なGHG排出ゼロのためには、軍事、災害のGHG排出も注視される

これまで戦争のGHG排出が推計された例として、湾岸戦争（90年8月～91年2月に被災した油井640ヵ所が8ヵ月炎上し3億CO₂t排出）、イラク戦争（03年3～5月の戦闘で1.4億CO₂t排出）などがある。今回の試算は火災やインフラ再建によるGHG排出も精緻に算定し、それらのGHG排出も大きいことが示された。火災のGHG排出では、19～20年に豪州で発生した山火事では5ヵ月間で7.4万km²が焼失し、気象衛星の分析から7.15億CO₂tという巨大なGHG排出であったと示された。大規模な火災を防いでいくことはGHG排出抑制の意義が大きい。

なお、気候変動枠組条約では軍隊からのGHG排出報告は任意となっているが、世界のGHG排出の1～6%は軍隊活動によるもので、海・空運による4%と同程度との研究もある。米軍の燃料使用によるGHG排出量は17年で2,336万CO₂tと試算された。また、温暖化で可能になる北極圏の開発で対立が顕在化するなど、気候変動が安全保障リスクを高める面もある。NATOは21年6月に気候変動と安全保障に関する行動計画を採択し、22年6月にはGHG削減計画を公表している。【新井喜博】